
新発見？ General English

— イギリスでの在外研究の余禄 —

橋本光憲

'96年4月から一年間、イギリスのノッティンガム大学で在外研究をする機会に恵まれた。テーマは「銀行経営の国際比較」であり、英語の方は滞在中に受け身で吸収できるものがあればいいと言った構えであった。前者の方は、たまたま大学のMBAコースで後期後半 Japanese Finance を教えて呉れということになり、1～3月はこれに忙殺されてしまった。これも在外研究の余禄と言え言えるかも知れない。今回ご報告したいのは、もう一つの余禄、後者の英語の方である。

私は、銀行論、外国為替論と併せてビジネス英語を教えている。英語としては、ESP (English for Specific Purposes. 分野別英語、Special

English) の一つ、金融英語に興味を持っている。そこで、ESPと対比するものとして、General English (GE、一般英語) とは何ぞやということに疑問を持っていた。特に、ここ数年間、国際教育委員長として自らも学生を引率して英語圏での研修に立ち会い、疑問は深まる一方であった。それもあって、本来の研究の合間を縫って、「General English 再考 — 海外英語研修の側面から」を纏めた。（『神奈川大学言語研究』第19号掲載）更に研究を続けて「General English の一考察 — Business English, Special English との比較において」を発表した。（神奈川大学経営学部『国際経営フォーラム』第8号）

そんなことで本来の研究がおろそかになってしまった嫌い無きにも非ずだが、調査の結論を一言で申し上げると、「今日、General Englishという言葉がまともに使われているのは、英国における外国人向けの短期英語研修においてであろう。同種のを米国では、一般に Intensive English training と称している。」ということである。日本では、General English を簡単に（厳しくいえば、安易に）一般英語という言葉に置き換えて使っている。こういって、皆さん「何を非常識なことを言ってるんだ」と怒られるかも知れない。しかし、英国で小・中学生に教えている英語（国語）はGEではなくて、Standard Englishなのである。

英国の図書館などでGEについて調べると、出てくる本は只一つ、General English Syllabus Design (1984) であり、古い本では General and Business English (1952) 程度である。その内容についてはここでは省くが、要するに参考になる文献は無きに等しいということである。内外の専門辞典類でも一切記述がなく、General English という言葉はいわば「俗語」なのである。私は、これを「新発見」と自称しているのだが、皆さんにはお認め頂けるだろうか。なお、僅かにESPの世界で、SEに対比する形で English for General Purposes (略して General English) という表現が定着しつつあるのが現状であろう。